

アガーミ意識とワッター意識：琉球方言の 指示代名詞から

内間, 直仁

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

5

(開始ページ / Start Page)

200

(終了ページ / End Page)

219

(発行年 / Year)

1979-10-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012752>

アガーミ意識とワッター意識

—琉球方言の指示代名詞から—

内 間 直 仁

目 次

- 1 はじめに
- 2 琉球方言における指示代名詞
- 3 指示代名詞の分類
- 4 u系の性格
- 5 アガーミ意識とワッター意識
- 6 アガーミ意識・ワッター意識と語形変化
- 7 他の表現におけるアガーミ意識

1 はじめに

琉球方言の人称代名詞の一人称・複数に、 ?a （私たち） ?aga:mi （私たち） watta: （私たち）の三つの語形があらわれる。“私たち”という意味をあらわすのに、なぜこの三つの語形が必要であるのか、三語形が併存しう理由はなんであるのかということについては、かつて書いたことがある（注1）。

その結論のみを述べると、まず ?a と ?aga:mi はそのあらわす意味内容、すなわち“私たち”をあらわす点においては全く同じであるが、その用法において区別を示す。 ?a は常に助詞 ga （が）をともなって、体言を修飾することを専らとする。 ?a ga ja: （私たちの家） ?a ga jima: （私たちの島）。一方、 ?aga:mi は連体修飾の機能はないが、それ以外ではほとんどの助詞をともなって広く用いられる。 ?aga:mi ja wura （私たちは居よう）。同じく“私たち”の意をあらわしながら、 ?a と ?aga:mi の両形が存しう理由は、そのような用法上の違いにある。 ?a は上代語の「あ」に対応し、 ?aga:mi は「吾が身」に対応する。 ?aga:mi は地域によっては、 ?agan ともなる。

次に、 ?a 、 ?aga:mi と watta: とはどういう関係にあるのかをみると、両者はその表わす意味内容において微妙な差異を示す。すなわち、両者は同じく“私たち”の意をあらわしていても、 ?a と ?aga:mi の場合は、聞き手を含む相手側をすべて“私たち”の中に包含する。 ?a 、 ?aga:mi の中に含まれた人々は一身同体意識を持ち、互いに基底において深く結ばれていることを意識する。また、そういう条件を備えていないような場面では、 ?a と ?aga:mi は用いられないといえる。それに対して watta: は聞き手を含む相手側を“私たち”の中に含めない。 watta: を用いる時は、聞き手およびその周辺に対しては、 ?itta: （君たち） natta: （あなたたち）などの意識がある。

watta:は「われたち」に対応する。

上記のような意味内容を簡潔にまとめて、かつて ?a, ?aga:mi は“彼我一体”の意味範疇を有し、watta:は“彼我对立”の意味範疇を有すと述べたことがある(注2)。watta:が話し手側と相手側を厳密に区別するところから、そこに“彼我对立”の意味範疇を認めることは妥当と解されるが、なおもう少し正確にいうならば、“話し手側”と“相手側”の二極を区別する“彼我二極”の意識構造がその基底にあるように解される。

地域によっては、?a, ?aga:mi のかわりに、wa: tʃʰa: が彼我一体の意味を表わし、それに対して wattʰa: が彼我二極の意味を表わしているところもあるようである(注3)。

また、「おもろ」でも「あ、あん」と「わ、わん」があらわれ、「あ」は「愛情・親しみ・尊敬をあらわすものであり、さかのぼっては共同体意識の顕現されたものとみることができる」ようである(注4)。

以上のように、琉球方言の中から、その社会の意識構造として“彼我一体”と“彼我二極”の意識構造をとりだすことができる。この二つの意識は、さらに指示代名詞の構造とも深くかかわりあっているということを見るのが本稿の目的である。

2 琉球方言における指示代名詞

代名詞の特質は、話し手と事柄との関係概念を表現するところにある。そして、その事柄が事物・場所・方向等である場合には、これらを一般に指示代名詞と呼んでいる。指示代名詞は、表現される事物・場所・方向等が話し手に近い関係にあるか、聞き手に近い関係にあるか、あるいは両者に対して第三者的關係にあるか、あるいは不定であるかによってそれぞれ表現形式の差異を生む。これを普通は、各々近称・中称・遠称・不定称の名で呼びわけている(注5)。

指示代名詞というものを、一応上記のようにとらえて、以下琉球方言における指示代名詞についてみていく。

琉球方言における指示代名詞、その中でも“事物”“場所”をあらわす指示代名詞を例として示すと、下記の通りになる。奄美方言から瀬戸内町古仁屋方言、沖縄方言から北部の瀬底島方言、宮古方言から平良市西里方言、八重山方言から石垣市川平方言、与那国町祖納方言をそれぞれとりあげる。語形はいわゆる近称・中称・遠称・不定称の順にあげる。

奄美大島瀬戸内町古仁屋

事物 kur(これ) ?ur(それ) ?ar(あれ) dir(どれ)

場所 kuma:(ここ) ?uma:(そこ) ?ama:(あそこ) da:(どこ)

古仁屋方言における“方向”“関係”“情態”の各形式も示すと、次の通りである。

方向 kan(ここへ) ?ugan(そこへ) ?agan(あそこへ) da:hatʃi(どこへ)

関係 kun(この) ?un(その) ?an(あの) din(どの)

情態 ka:ʃun(こんな) ?ugaʃun(そんな) ?agaʃun(あんな) ?ikjaʃun(どんな)

ka:ʃi(こう) ?uga:ʃi(そう) ?agaʃi(ああ) ?ikjaʃi(どう)

このように古仁屋方言では、いわゆる近称・中称・遠称・不定称が語形的にも意味的にもそれぞれ相互にはりあい関係を保っているとみうけられたが、意味的はりあい関係については、もう一度くわしく調査してみる必要がある。

沖繩本島北部瀬底島

事物 furi (これ, それ) ?uri (これ, それ) ?ari (あれ) diru (どれ)

場所 fuma (ここ, そこ) ?uma, ma: (ここ, そこ) ?ama (あそこ) ra: (どこ)

瀬底方言においては、furiと?uriは、ほとんど同じように用いられ(従って、両者が同じ意味領域を有して)、furiと?uriがひとつにまとまり、それと?ariとが対立するような構造を示す。同様のことは、fumaと?umaの場合にもあてはまり、fumaと?umaがひとつになって、それと?amaとが対立している。furiと?uriおよびfumaと?umaが意味領域を同じくしたために、現在中年層以下では、furi, fumaはほとんど用いられなくなってきつつある。?umaは?uが脱落して、ma:の形がよく用いられる。

関連して、“方向”をあらわす代名詞の場合もみても、それらの場合も同様のことがいえる。

方向 fuma ggati (ここへ, そこへ)

?uma ggati	}	(ここへ, そこへ)
ma: ggati		

?ama ggati (あそこへ)

ra: ggati (どこへ)

fuma ggati, ?uma ggatiが同じ意味をあらわし、?ama ggatiと対立している。fuma ggatiはほとんど用いられなくなってきている。

“関係”をあらわす形式は次のようにあらわれる。

関係 funu - kin (この一着物, その一着物)

?unu - kin (この一着物, その一着物)

?anu - kin (あの一着物)

nu: nu - kin (どの一着物)

この場合も funuと?unuが同じ意味をあらわし、それと?anuが対立している。現在ではfunuもほとんど忘れかけられている。

“情態”をあらわす形式は、次のようにあらわれる。

情態	hanne: nu - mun	}	(こんな一もの, そんな一もの)
	hanne: ru - mun		
	?anne: nu - mun	}	(こんな一もの, そんな一もの, あんな一もの)
	?anne: ru - mun		
	t?anne: nu - mun	}	(どんな一もの)
	t?anne: ru - mun		

hai - saŋke: (こう-するな, そう-するな)

ʔai - saŋke: } (こう-するな, そう-するな, ああ-するな)
ʔan - saŋke: }

tʃa: - su: ga (どう-するか)

hantʃi - sun (こんなに-する, そんなに-する)

ʔantʃi - sun (こんなに-する, そんなに-する, あんなに-する)

taʃi - su: ga (どんなに-するか)

これからもわかるように, “情態”をあらわす形式の場合は, これまでの“事物”“場所”“方向”“関係”の場合とは, 多少異なるところがでてくる。たとえば, “事物”をあらわす代名詞の場合, いわゆる近称・中称に furi (これ, それ)と ʔuri (これ, それ)のような ku系と u系の語があらわれるのに対し, “情態”の場合は, hanne: nu (こんな, そんな) hai (こう, そう) hantʃi (こんなに, そんなに)のような ha系の語があらわれる。この ha系の語の意味領域は, ʔanne: nu (こんな, そんな, あんな) ʔai (こう, そう, ああ) ʔantʃi (こんなに, そんなに, あんなに)のような a系の語の意味領域につつまこまれている。そのために, ha系の語は今ではほとんど忘れかけられており, かわりに a系の語が近称・中称・遠称にかかわりなく, 広く用いられつつある。また, “情態”をあらわす形式の場合, u系の語もあらわれない。

このように, “情態”をあらわす形式の場合は, その意味領域内において相対立するものは見出せないように思われるが, しかし, 次のような“情態”をあらわす形式を用いての対語的表現をみれば, これまでと同様, 二対立の構造(近称的と遠称)を見出すことができる。

ʔai hai sun (ああこうする)

ʔai nai hai nai sun (ああなったり, こうなったりする)

ʔai ʃi: hai ʃi: sun (ああしたり, こうしたりする)

ʔantʃi hantʃi sun (あんなにこんなにする)

ʔantʃi hantʃi ʔjaŋke: (あんなにこんなに言うな)

この対語的表現は現在もよく用いられる。

以上のように, 瀬底方言では, いわゆる近称(ku系)と中称(u系)の対立はほとんどなく, 近称と中称がひとつの意味領域を形成して, それと遠称(a系)とが対立するような構造を示す。

宮古平良市西里

事物 kui (これ) ui (それ, あれ) kai (あれ) idʒi (どれ)

場所 kuma (ここ) uma (そこ, あそこ) kama (あそこ) idza, ndza (どこ)

西里方言の ui (または uma) は中称として用いられると同時に, 遠称 kai (または kama) の意味領域をも覆うものであると解される。同方言では, “情態”をあらわす形式も, kantʃi: (こう)と antʃi: (そう, ああ), kantʃi: nu (こんな)と antʃi: nu (そんな,

あんな)の二対立を示し、いわゆる中称と遠称とがひとつにまとまっている。

八重山石垣市川平

事物 *ku_{ri}* (これ) *uri* (それ, あれ) *ka_{ri}* (あれ) *duri* (どれ)
 場所 *ku_{ma}* (ここ) *uma* (そこ, あそこ) *ka_{ma}* (あそこ) *duma* (どこ)

川平方言の *uri* (または *uma*) も中称として用いられると同時に、遠称 *ka_{ri}* (または *ka_{ma}*) のかわりにもよく用いられる。すなわち、*uri* (または *uma*) は“それ”(または“そこ”)と“あれ”(または“あそこ”)の両意味領域を覆うものである。同方言では *uri* (または *uma*) と *ka_{ri}* (または *ka_{ma}*) が意味領域を同じくし、それと *ku_{ri}* (または *ku_{ma}*) とが対立している。“情態”をあらわす形式も *ka_{fi}* (こう) と *a_{fi}* (そう, ああ), *ka_{furu}* (こんな) と *a_{furu}* (そんな, あんな) の二対立構造を示す。

与那国町祖納

事物 *ku* (これ, それ) *u* (これ, それ) *kari* (あれ) *nu* (どれ)
 場所 *kuma, kumi* (ここ, そこ) *uma* (ここ, そこ) *kama, kami* (あそこ) *mma, mmi* (どこ)

祖納方言でも *ku* (または *kuma*) と *u* (または *uma*) の語形はあっても、両者はほとんど意味領域を同じくし、ともに“これ, それ”(または“ここ, そこ”)の意に用いられる。そしてこの *ku, u* (または *kuma, uma*) の意味領域に対し、*kari* (または *kama*) の意味領域が対立している。

祖納方言の“方向”“関係”“情態”をあらわす各形式も示すと、次の通り。

方向 *kuma gki* (ここへ, そこへ)
uma gki (ここへ, そこへ)
kama gki (あそこへ)
mma gki (どこへ)

関係 *unu - munu* (この一もの, その一もの)
kanu - munu (あの一もの)
ndinu - munu (どの一もの)

情態 *unninu - mun* (こんな一もの, そんな一もの)
karinninu - mun (あんな一もの)
nunninu - mun (どの一もの)
kunni (こう, そう)
unni (こう, そう)
karinni (ああ)
nugu fi (どう)

以上示した五つの方言の指示代名詞を語の系統別に分類すると、次のように *ku*系, *u*系, *a*系(先島方言は *ka*系)の三系統に分けることができる(不定称は除く)。

	ku 系	u 系	a 系
古仁屋 事物	kur	?ur	?ar
場所	kuma :	?uma	?ama :
瀬底 事物	furi	?uri	?ari
場所	fuma	?uma	?ama
西里 事物	kui	ui	kai
場所	kuma	uma	kama
川平 事物	ku _o i	uri	ka _o i
場所	ku _o ma	uma	ka _o ma
祖納 事物	ku	u	kari
場所	kuma, kumi	uma	kama, kami

この中で、ku 系・a 系はほぼ近称・遠称にあたる。

問題は u 系である。u 系は中称の語のようにもみえるが、しかし必ずしもそうとばかりいいきれない要素を含んでいる。たとえば、古仁屋方言などでは中称として用いられているようであるが、瀬底方言や与那国方言などでは、近称・中称の両方に用いられている。また一方、西里方言や川平方言などでは中称と遠称に用いられている。すなわち、u 系の語は、方言によっては近称にも中称にもまた遠称にも用いられているわけである。このような u 系の語の用法にこそまさに琉球方言における指示代名詞の特質が浮彫りにされているものと解される。

以下、その u 系の語を中心に琉球方言の指示代名詞をみることによって、その社会構造の一端にふれてみたい。

3. 指示代名詞の分類

琉球方言の指示代名詞は、u 系が ku 系や a 系とどのようなはりあい関係を保っているかによって、次の 6 類に分けることができる。不定称は本稿ではさしあたって問題としてとりあげないが、その語形は示しておく。なお、はりあい関係は / 印で示す。また、// 印でくくった地点の資料は『琉球方言の総合的研究』（平山輝男 大島一郎 中本正智共著 明治書院 1966年）と『琉球先島方言の総合的研究』（平山輝男 大島一郎 中本正智共著 明治書院 1967年）による。

〔I 類〕 ku 系 u 系 / a 系

これは、ku 系・u 系・a 系の三つの語形があらわれながら、u 系の意味領域が ku 系まで広がっていて、ku 系と u 系がひとつにまとまり、それが a 系と対立しているような方言である。この類に属するものとしては、下記の諸方言がある。沖縄本島方言はほとんどこの類に属する。また先に示した瀬底方言や与那国祖納方言などもこの類に含められる。瀬底方言や与那国祖納方言などでは、ku 系と u 系はほとんど同じ意味になっているが、これからするならば、むしろこの類の典型的な例といえよう。

奄美大島字検村湯湾

事物 kuri (これ) ?uri (これ, それ) / ?ari (あれ) / dëri (どれ)
 場所 kuma (ここ) ?uma (ここ, そこ) / ?ama (あそこ) / da (どこ)

奄美喜界島志戸桶

事物 Furi (これ) ?uri (これ, それ) / ?ari (あれ) / diru (どれ)
 場所 fuma (ここ) ?uma (ここ, そこ) / ?ama (あそこ) / dga:(どこ)

沖縄伊是名島諸見

事物 Furi:(これ) ?uri:(これ, それ) / ?ari:(あれ) / diru (どれ)
 場所 fuma:(ここ) ?uma:(ここ, そこ) / ?ama:(あそこ) / da:(どこ)

諸見方言においても, Furi: と ?uri: は意味的に非常に近いようである。現在では Furi: あまり用いられず, かわりに ?uri: がよく用いられるようである。また, “場所”をあらわすものとして, fa:(ここ)という形もあらわれる。

沖縄伊是名島勢理客

事物 Furi (これ) ?uri (これ, それ) / ?ari (あれ) / diru (どれ)
 場所 fa:(ここ) ?ma:(ここ, そこ) / ?ama (あそこ) / da:(どこ)

沖縄大宜味村喜如嘉

事物 Furi (これ) ?uri (これ, それ) / ?ari (あれ)
 場所 fuma (ここ) ?uma (ここ, そこ) / ?ama (あそこ)

沖縄大宜味村塩屋

事物 Furi (これ) ?uri (これ, それ) / ?ari (あれ)
 場所 fuma (ここ) ?uma (ここ, そこ) / ?ama (あそこ)

沖縄伊江島西江前

事物 Furi (これ) ?uri (これ, それ) / ?ari (あれ) / dziru (どれ)
 場所 fuma (ここ) ?ma:(ここ, そこ) / ?ama (あそこ) / da:(どこ)

西江前方言でも Furi, fuma はあまり用いられず, かわりに ?uri, ?ma がよく用いられている。

沖縄今帰仁村仲宗根

事物 Furi (これ) ?uri (これ, それ) / ?ari (あれ)
 場所 fuma (ここ) ?uma (ここ, そこ) / ?ama (あそこ)

沖縄本部町渡久地

事物 Furi (これ, それ) ?uri (これ, それ) / ?ari (あれ) / din (どれ)
 場所 fuma (ここ, そこ) ?uma (ここ, そこ) / ?ama (あそこ) / ma:(どこ)

渡久地方言も ku系と u系が全く同じように用いられ, 意味上の区別がほとんど失なわれている。

沖縄本部町並里

事物 kuri (これ) ?uri (これ, それ) / ?ari (あれ) / dgi ru (どれ)

場所 kuma (ここ) ?uma (ここ, そこ) / ?ama (あそこ) / ma:(どこ)

沖縄金武村金武

事物 kuri (これ) ?uri (これ, それ) / ?ari (あれ)

場所 kuma:(ここ) ma:(ここ, そこ) / ?ama:(あそこ)

沖縄具志川市上江渚

事物 kuri (これ) ?uri (これ, それ) / ?ari (あれ) / duri (どれ)

場所 kuma (ここ) ?uma (ここ, そこ) / ?ama (あそこ) / ma:(どこ)

沖縄浦添市小湾

事物 kuri (これ) ?uri (これ, それ) / ?ari (あれ) / dziru (どれ)

場所 kuma (ここ) ?uma (ここ, そこ) / ?ama (あそこ) / ma:(どこ)

沖縄豊見城村饒波

事物 kuri (これ) ?uri (これ, それ) / ?ari (あれ) / dziru (どれ)

場所 kuma (ここ) ?uma (ここ, そこ) / ?ama (あそこ) / ma:(どこ)

久米島仲里村饒間

事物 kuri (これ) ?uri (これ, それ) / ?ari (あれ) / nu:(なに)

場所 kuma (ここ) ?uma (ここ, そこ) / ?ama (あそこ) / ma:(どこ)

宮古平良市大浦

事物 kui (これ) ui (これ, それ) / kai (あれ) / ndzi (どれ)

場所 kuma (ここ) uma (ここ, そこ) / kama (あそこ) / ndza (どこ)

大浦では、“情態”をあらわす形式は、antfi (こう, そう)とkantfi (ああ), antfinu (こんな, そんな)とkantfinu (あんな)になる。

〔Ⅱ類〕 ku系 / a系

これはu系の語が見出しえないで、ku系がa系と対立する構造を示す。この場合、ku系は“これ”と“それ”の両意味領域をになっている。沖縄北部国頭方言がこの類に属する。

沖縄国頭村奥

事物 Furi (これ, それ) / ?ari (あれ)

場所 fuma (ここ, そこ) / ?ama (あそこ)

沖縄国頭村辺野喜

事物 Furi (これ, それ) / ?ari (あれ)

場所 fuma (ここ, そこ) / ?ama (あそこ)

沖縄国頭村佐手

事物 Furi (これ, それ) / ?ari (あれ)

場所 fuma (ここ, そこ) / ?ama (あそこ)

沖縄国頭村与那

事物 Furi (これ, それ) / ?ari (あれ) / dziru (どれ)

場所 fuma (ここ, そこ) / ?ama (あそこ) / dʒaː (どこ)

沖繩国頭村辺土名

事物 furi (これ, それ) / ?ari (あれ) / dʒiru (どれ)

場所 fuma (ここ, そこ) / ?ama (あそこ) / dʒaː (どこ)

[Ⅲ類] u系 / a系

この場合は ku系の語が見出しえないで, u系が a系と対立するという構造を示す。u系は“これ”と“それ”の両意味領域をになう。

// 沖永良部和泊町玉城 //

事物 ?uri (これ, それ) / ?ari (あれ) / ?uda (どれ)

場所 ?maː (ここ, そこ) / ?amaː (あそこ) / nuː (どこ)

沖繩国頭村謝敷

事物 ?uri (これ, それ) / ?ari (あれ) / dʒiru (どれ)

場所 ?uma (ここ, そこ) / ?ama (あそこ) / dzaː (どこ)

沖繩東村有銘

事物 ?uri (これ, それ) / ?ari (あれ) / dʒiru (どれ)

場所 ?mma (ここ, そこ) / ?ama (あそこ) / maː (どこ)

// 宮古平良市狩俣 //

事物 uri (これ, それ) / kari (あれ) / ndʒi (どれ)

場所 uma (ここ, そこ) / kama (あそこ) / ndza (どこ)

宮古平良市大神

事物 uri (これ, それ) / kari (あれ) / nti (どれ)

場所 uma (ここ, そこ) / kama (あそこ) / nta (どこ)

[Ⅳ類] ku系 / u系 a系

これも ku系・u系・a系の三語形があらわれるが, この場合は, u系が a系の方へ意味領域を広げ, u系と a系がひとつにまとまって, これと ku系とが対立しているような方言である。宮古平良市西里方言や八重山石垣市川平方言などにみられるものであるが, 他に次の諸方言にも認めることができる。宮古・八重山方言のほとんどはこの類に属する。

宮古下地町与那覇

事物 kuri (これ) / uri (それ, あれ) kari (あれ) / ndʒi (どれ)

場所 kuma (ここ) / uma (そこ, あそこ) kama (あそこ) / ndza (どこ)

宮古来間島

事物 kuri (これ) / uri (それ, あれ) kari (あれ) / ndʒi (どれ)

場所 kuma (ここ) / uma (そこ, あそこ) kama (あそこ) / ndʒa (どこ)

// 宮古池間島 //

事物 kui (これ) / ui (それ, あれ) kai (あれ) / idi (どれ)

場所 kuma (ここ) / uma (そこ, あそこ) kama (あそこ) / idga (どこ)

〃八重山石垣〃

事物 kuri (これ) / uri (それ, あれ) ari (あれ) / dgiri (どれ)

場所 kuma (ここ) / uma (そこ, あそこ) kama (あそこ) / dzuma (どこ)

ごく最近(1979年7月26日)八重山石垣市登野城出身の法政大学大学院生西表宏さんからその点についてたしかめることができた。西表さんによれば、やはり“これ”と“それ, あれ”の対立が明確であり, “それ”と“あれ”の区別は漠然としているとのことであった。

〃八重山竹富島〃

事物 kuri (これ) / uri (それ, あれ) kari (あれ) / ndzari (どれ)

場所 kuma (ここ) / uma (そこ, あそこ) kama (あそこ) / mai (どこ)

八重山鳩間島

事物 kuri (これ) / uri (それ, あれ) kari (あれ) / nu:(なに)

場所 kuma (ここ) / uma (そこ, あそこ) kama (あそこ) / mana (どこ)

鳩間方言については, 本稿をまとめる際にも加治工真市氏から改めてたしかめることができた。

〃八重山小浜島〃

事物 kuri (これ) / uri (それ, あれ) kari (あれ) / dzuri (どれ)

場所 kuma (ここ) / uma (そこ, あそこ) kama (あそこ) / dzuma (どこ)

小浜方言は引用文献(『琉球先島方言の総合的研究』)では, kuri(これ) uri(それ) kari(あれ) dzuri(どれ), および kuma(ここ) uma(そこ) kama(あそこ) dzuma(どこ)と記述し, ku系・u系・a系(ka系)が対等なほりあい関係にあるものとして記述してある。一方, 同方言の“関係”あらわす形式をみると, kunu(この) unu(その, あの) dunu(どの)と記述してあり, “その”と“あの”はひとつにまとまって対立を示さない。“情態”をあらわす形式にしても kairu(こんな)と hairu(あんな)の対立しか示さない。これからするならば, “事物”“場所”の場合も三語形はあるが, u系とa系(ka系)はほとんど対立を示していないのではなかろうかと解される。このような解釈をして小浜方言の資料は示してある。従って, 引用文献の記述そのままではない。N類で引用されている資料はほとんどそうである。

[V類] ku系 / u系

これはa系の語が見出されず, ku系とu系が対立しているものである。u系が“それ”と“あれ”の両意味領域をになっている。

〃八重山西表租納〃

事物 k_uri (これ) / uri (それ, あれ) / duri (どれ)

租納の“場所”をあらわす代名詞は, 引用文献(『琉球先島方言の総合的研究』)では, k_uma(ここ) uma(そこ) k_ama(あそこ) dza:(どこ)と記述し, a系の語があ

られる。そして、ku系・u系・a系が対等なはりあい関係にあるものとして記述してある。一方、“関係”をあらわす形式はkunu（この）とunu（その、あの）の対立だけで、“事物”の代名詞の構造と同じである。租納方言の代名詞については、まだ不明なところが多いが、ここでは一応、V類に位置づけておく。

〃八重山波照間島〃

事物 kuri（これ）/ uri（それ、あれ）/ dzaru（どれ）

場所 mo（ここ）/ ha（そこ、あそこ）/ dza（どこ）

波照間方言では“関係”をあらわす形式もkunu（この）unu（その、あの）dzanu（どの）であり、“情態”をあらわす形式もkunsuku（こんなに）unsuku（そんなに、あんなに）nusuku（どんなに）である。

[V類] ku系 / u系 / a系

これはku系・u系・a系が各々独立の意味領域をになって、三者が対等に対立している方言である。奄美大島瀬戸内町古仁屋方言などにみられるもので、古仁屋以外では、次の諸方言などにもみられる。ただし、古仁屋も含めて、この類に属する方言は、もっとくわしく調査すれば、先に示したI類かIV類のいずれかに分類しなおされる可能性がある。たとえば、この類に入っている奄美・沖縄方言はI類に、宮古の多良間仲筋・水納方言はI類かIV類のいずれかに属する可能性がある。以上のような可能性を含みつつも、ここでは当面これらをIV類として分類しておく。

〃奄美大島名瀬市名瀬〃

事物 kuri（これ）/ ?uri（それ）/ ?ari（あれ）/ duri（どれ）

場所 kuma（ここ）/ ?uma（そこ）/ ?ama（あそこ）/ duma, da:（どこ）

〃奄美大島宇検村生勝〃

事物 kuri（これ）/ ?uri（それ）/ ?ari（あれ）/ diri（どれ）

場所 kuma（ここ）/ ?uma（そこ）/ ?ama（あそこ）/ da:（どこ）

〃徳之島伊仙町伊仙〃

事物 kuri（これ）/ ?uri（それ）/ ?ari（あれ）/ din（どれ）

場所 kuma（ここ）/ ?uma（そこ）/ ?ama（あそこ）/ da:（どこ）

〃徳之島天城町平土野〃

事物 kuri（これ）/ ?uri（それ）/ ?ari（あれ）/ duri（どれ）

場所 kuma（ここ）/ ?uma（そこ）/ ?ama（あそこ）/ da:（どこ）

徳之島 徳之島町井之川

事物 kuri（これ）/ ?uri（それ）/ ?ari（あれ）/ din（どれ）

場所 kuma（ここ）/ ?uma（そこ）/ ?ama（あそこ）/ da:（どこ）

井之川方言の“方向”“関係”“情態”をあらわす各形式も、同様の対立構造を示す。

方向 kan（ここへ）/ ?ugan（そこへ）/ ?agan（あそこへ）/ da:tsi（どこへ）

関係 kun (この) / ?un (その) / ?an (あの) / din (どの)
 情態 kaʃʃu (こんな) / ?uʃʃu (そんな) / ?aʃʃu (あんな) / ?ikjaʃʃu (どんな)
 kasi (こう) / ?ugasi (そう) / ?agasi (そう) / ?ikjasi (どう)

沖永良部知名町田皆

事物 furi (これ) / ?uri (それ) / ?ari (あれ) / ?uduru (どれ)
 場所 fuma (ここ) / ?uma (そこ) / ?ama (あそこ) / ?uda (どこ)

田皆の“方向”“関係”“情態”をあらわす各形式は次の通り。

方向 fuma gatʃi (ここへ) / ?uma gatʃi (そこへ) / ?ama gatʃi (あそこへ)
 / ?uda gatʃi (どちらへ)

関係 funu (この) / ?unu (その) / ?anu (あの) / ?uduru (どの)
 情態 hannjanu (こんな) / gannjanu (そんな) / ?agannjanu (あんな)
 / ?ikjannjanu (どんな)

hanʃi (こう) / ganʃi (そう) / ?aganʃi (ああ) / ?ikjaʃi (どう)

沖永良部和泊町国頭

事物 furi (これ) / ?uri (それ) / ?ari (あれ) / ?uduru (どれ)
 場所 fuma:(ここ) / ?uma:(そこ) / ?ama:(あそこ) / ?uda:(どこ)

国頭の“方向”“関係”“情態”をあらわす各形式は次の通り。

方向 ma:tʃi (ここへ) / ?umatʃi (そこへ) / ?amatʃi (あそこへ)
 / ?uda:tʃi (どこへ)

関係 fun (この) / ?un (その) / ?an (あの) / ?uduru (どの)
 情態 hanʃanu (こんな) / ganʃanu (そんな) / ?aganʃanu (あんな)
 / ?itʃaʃanu (どんな)
 fun (こう) / han (そう) / ?agan (ああ) / ?itʃa (どう)

〃 与論島麦屋 〃

事物 furi (これ) / ?uri (それ) / ?ari (あれ) / ?uduru (どれ)
 場所 kuma (ここ) / ?uma (そこ) / ?ama (あそこ) / ?ida (どこ)

沖繩本島南部奥武(注6)

事物 kuri (これ) / ?uri (それ) / ?ari (あれ) / dʒuri, nu:(どれ)
 場所 kuma (ここ) / ?uma (そこ) / ?ama (あそこ) / ma:(どこ)

〃 宮古多良間村仲筋 〃

事物 kuri (これ) / uri (それ) / kari (あれ) / idi (どれ)
 場所 kuma (ここ) / uma (そこ) / kama (あそこ) / ida (どこ)

宮古多良間村水納

事物 kure:(これ) / ure:(それ) / kare:(あれ) / ndju (どれ)
 場所 kuma (ここ) / uma (そこ) / kama (あそこ) / nda (どこ)

水納の“方向”“関係”“情態”をあらわす各形式は次の通り。

方向 kuma gkai (ここへ) / uma gkai (そこへ) / kama gkai (あそこへ) /
nda gkai (どこへ)
関係 kunu (この) / unu (その) / kanu (あの) / ndanu (どの)
情態 kunfinu (こんな) / unfinu (そんな) / kanfinu (あんな) / no: bafinu
(どんな)

4 u系の性格

以上示した指示代名詞の各類は、さらに大きく次の甲種、乙種、丙種にまとめることができる。以下、“事物”をあらわす代名詞に例をとって述べていく。

甲種	{	I類	ku系(これ) u系(これ, それ) / a系(あれ)
		II類	ku系(これ, それ) / a系(あれ)
		III類	u系(これ, それ) / a系(あれ)
乙種	{	IV類	ku系(これ) / u系(それ, あれ) a系(あれ)
		V類	ku系(これ) / u系(それ, あれ)
丙種	VI類	ku系(これ) / u系(それ) / a系(あれ)	

これからわかるように、u系の語は、甲種では“これ、それ”の意をあらわし、乙種では“それ、あれ”の意をあらわし、丙種では“それ”の意をあらわしている。先にも述べたように、丙種は精密な調査をすれば、I類かIV類に分類しなおされる可能性があるが、そうなると、u系はきわめてはっきりとその性格をあらわしている。

すなわち琉球方言におけるu系は、ku系やa系と対等にはりあい関係を保つ性格のものではなく、ある地域においてはku系の意味まで内包し、また他の地域においてはa系の意味まで内包して用いられる語である。このようなu系にあらわれる性格はなにを意味するかといえば、琉球方言の指示代名詞においては、いわゆる中称という範疇は認めがたく、共通語の中称にあたるものは、近称か遠称のどちらかに含められてしまっているということの意味する。端的にいうならば、不定称は別にして、琉球方言では、ほとんどの方言で話し手に近い関係にあるかあるいはそれ以外の関係にあるかという二極構造を示していることになる。

5 アガーミ意識とワッター意識

初めに述べたように、指示代名詞における近称・中称・遠称というものは、表現される事物・場所・方向などが話し手に近い関係にあるか、聞き手に近い関係にあるか、あるいは両者に対して第三者的関係にあるかによって生ずる表現差につけられたものである。このように、近称・中称・遠称というものは、常に「話し手」「聞き手」「第三者」というものと深くかかわっており、またその「聞き手」「第三者」というものも「話し手」との関係なしには成立しえない概念である。従って、究極的には話し手の意識のあり方が指示代名詞の構造を決定しているのであり、話し手の意識

を明らかにすれば、指示代名詞の構造も自ら明らかになるものと解される。

さて、琉球方言において、中称というものが認めがたく、少なくとも漠然としていて、はっきりしないということについては既に述べたところであるが、これは話し手が聞き手そのもの、すなわち、「話し手」「聞き手」「第三者」という三元的対立構造のなかにおける「聞き手」そのものとして位置づけていないことを意味するであろう。

一方、これも初めに述べたことであるが、琉球方言の一人称代名詞の中から、アガーミ意識（彼我一体意識）とワッター意識（彼我二極意識）をとりだすことができる。

アガーミ意識は話し手が聞き手を、我と相対立する他者として位置づけないで、我と同一視し、または一体感的意識でとらえてしまう意識である。その意識の目は情意界へ向けられており、話し手を中心にして、自然とにじみでてくる情意が四方八方へ浸透していった世界である。従って、アガーミ意識の世界には他者はありえないし、話し手と他を仕切る空間的垣根もありえない。これは一元的世界といえよう。

ワッター意識は、話し手が聞き手を我と相対立する他者としてとらえる意識である。その意識の目は客観界へ向けられているといえよう。客観界へ向けられる目、すなわち外へ向かう目は同時に内へ向かう目も兼ねそなえている。従って、内・外の意識がはっきりしている。ワッター意識の世界には明らかに他者を他者とする意識があり、従って、話し手と他者を仕切る空間的垣根も存することになる。これは二元的世界である。

この一人称代名詞の中から見出されたアガーミ意識とワッター意識は、指示代名詞の構造とも深く関係している。

ところで、話し手の意識を問題とすると、聞き手・第三者も深くかかわることは当然である。先に示した琉球方言の指示代名詞の例が単数形のみであったがために、ここで用いる「話し手」「聞き手」「第三者」というものも、とかく空間をもたない単数概念で理解されがちであるが、「話し手」「聞き手」「第三者」には複数もありうるわけである。指示代名詞の構造とアガーミ意識・ワッター意識との関係を見ると、むしろ「話し手」「聞き手」「第三者」というものを、「一定の空間をともなった複数」の意で用いた方が理解しやすい。アガーミ（私たち）ワッター（私たち）が複数形式だからである。そこでそういう意もたくしてこの三つの語を以下「話し手側」「聞き手側」「第三者側」のように用いる。

以下、指示代名詞の構造とこの両意識がどうかかわっているかについてみていきたい。

まず、甲種（Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類）の構造にはアガーミ意識とワッター意識を認めることができる。すなわち、話し手側（ku系）が聞き手側（u系）を聞き手側としてとらえないで、話し手側と聞き手側が一体化して、その区別がつかなくなっているということは、まさにアガーミ意識の支配する場である。この場における個々のものは個としての認定をうけはするが、これらは常に話し手の奥深くからにじみ出てくる一体感意識でとらえられた個と個なのである。アガーミ意識の支配している場においては、他者意識というものはありえない。従って、アガーミ意識の支配している間は、a系（第三者）は意識にのぼりようがない。ただし、いったんa系が意識にのぼってしまうと、a

系は他者となり、それと同時に、今までアガーミ意識の支配していた場（ku系またはu系）は、途端にワッター意識の場へと転換してしまう。すなわち、a系を我と相対立する他者として位置づける。彼と我の二極構造、すなわちワッター意識の場への転換である。

このように、一元的世界（アガーミ意識）と二元的世界（ワッター意識）が立体的に組合わされて形成されているのが甲種の構造であると理解される。

この甲種の構造にアガーミ意識のあらわれを認めることができるということは、これらの類に属する方言で、アガーミ系の一人称代名詞があらわれることからもうらづけられるであろう。たとえば、Ⅰ類に属する沖縄本島北部の本部半島方言には、*ʔa*（私たち）*ʔaga: mi*または*ʔagan*（私たち）があらわれるし、同じくⅠ類に属する与那国町祖納方言にも*a*（私）*anu*（私）があらわれる。また、Ⅲ類に属する宮古大神方言にも*a*（私）*an*（私）があらわれる。

次に、乙種（Ⅳ類、Ⅴ類）の構造には、アガーミ意識は認めがたく、ワッター意識が認められる。すなわち、聞き手側（u系）を我と相対立するものとしてとらえ、第三者側（a系）とともに他者としての位置づけをする。これはワッター意識のあらわれ以外のなものでもない。ワッター意識による話し手側の認識の目は他者に向けられると同時に、必然的に内なる自己側にも向けられる。ここでの自己側（ku系）は甲種におけるそれ（ku系とu系）よりも、より限定されているがゆえに、我に対する認識も深まりをみせるものと解される。乙種は甲種に比較して、我意識の発達した方言だといえよう。

乙種には宮古・八重山方言が属しているが、両方言には宮古の大神方言や与那国の祖納方言を除いては、今のところアガーミ系の一人称代名詞は見出しえない。

最後の丙種（Ⅵ類）は、これが琉球方言にあるとすれば、この構造にはアガーミ意識はもちろんのことワッター意識も見出しえない。甲種が一元的世界、乙種が二元的世界であるならば、丙種は三元的世界といえよう。乙種において、より限定された自己側（ku系）とそれと相対立する他者側（u系・a系）に向けられていたにすぎなかった認識の目は、やがて他者側の中にも相対立するもの、すなわち聞き手側（u系）と第三者側（a系）を識別する認識の目へと発展していく。これら三者の相対の中において、自己に対する認識もいっそう深められ、我の意識もより客観化されることになる。この意味で、丙種は乙種よりもまた一段と我意識の発達した方言だといえよう。

以上のように、琉球方言の指示代名詞の構造の中にもアガーミ意識とワッター意識を見出すことができる（ただし、丙種を除く）。両意識の中でも、主にワッター意識が琉球方言の代名詞の構造を支えているように解される。

ワッター意識に包含される場は、時には家族の場であり、また隣近所を含めた場であることもある。あるいは時には、村全体、島全体である場合もある。すなわち、これらの支配する場の広狭は固定的でない。要はどこに他者を想定するかによって、場の広狭は決まるのである。

意識構造の変化過程としては、アミーガ意識→ワッター意識→我意識の順であろう。それが方言の新古関係に直接つながるものと速断することは危険であるが、指示代名詞の構造に限っていえば、甲種の構造よりも乙種の構造は新しく、また乙種の構造よりも丙種の構造は新しいとみることがで

きるであろう。

6 アガーミ意識・ワッター意識と語形変化

アガーミ意識とワッター意識が、指示代名詞の語形変化にどうかかわるのかということについて、以下述べてみたい。

既に述べてきたように、甲種の方言にはアガーミ意識とワッター意識のあらわれを認めることができる。すなわち、ku系・u系の場合はアガーミ意識が支配している。ただし、これがいったんa系に意識が向けられると、途端にku系・u系の場合はワッター意識へ転換してしまうということであった。

さて、アガーミ意識は他者を区別しない。他者を区別しない場になぜⅠ類の方言ではku系・u系の二語形が必要であるのかという問題がおきてくる。これはまさに二語形は必要ないわけで、方言によってはそのどちらか一方がすでに用いられなくなってきている。たとえば沖縄本島北部瀬底島方言では、ku系・u系の語形としてはFuri(これ、それ)・?uri(これ、それ)があらわれるが、furiは60代以上の人でないと、ほとんど用いなくなってきている。30代・40代になると、?uriのみを用いて、Furiの語形をすっかり忘れている人も多い。同じく本部町渡久地方言においても、Furi(これ、それ)・?uri(これ、それ)があらわれるが、Furiはほとんど用いられなくなりつつある。

これからすると、Ⅱ類・Ⅲ類の方言にも、かつてku系とu系の二つの語形が存したのではなかろうか。Ⅱ類に属する沖縄本島北部国頭村の奥・辺野喜・佐手・与那・辺土名の諸方言では、Furi(これ、それ)と?ari(あれ)の二語形が対立し、u系の語が欠けている。また、Ⅲ類に属する沖永良和泊町玉城、沖縄本島北部国頭村謝敷・東村有銘、宮古の狩俣・大神の諸方言では、?uri(またはuri)(これ、それ)と?ari(またはkari)(あれ)が対立していて、ku系の語が欠けている。これらの地域においても、かつてku系とu系の語があったが、両者がはりあい関係になかったがために、どちらか一方が失なわれていったものではなかろうか。

一方、ku系・u系はa系に対してはワッター意識の支配する場である。ku系・u系とa系の対立は明確である。対立が明確であるがゆえにa系の語は失なわれることはない。甲種の方言においてa系の語はきれいに保持されている。

次に、乙種の方言にはワッター意識のあらわれを認めることができた。すなわち、ku系の場合は、u系またはa系の場に対して比較的限定されたワッター意識の支配する場である。ただし、u系とa系の場合は、話し手側にとっては等しく他者側であり、その中に対立を認めない。従って、u系とa系のうちどちらかが失なわれる可能性がある。Ⅴ類はその中のa系が失なわれたものであろう。

以上みてきたところから、以下のことが推定される。すなわち、いつの時代であるか定かではないが、かつて琉球方言の中に、ku系・u系・a系の三語形が入ってきた。この三語形は同時に入ってきたとは限らない。その中の一語があったところへ、他の二語が入ってきた可能性もありうるし、あるいは二語あったところへ、他の一語が入ってきた可能性もありうる。ただし、琉球方言

の中にアガーミ意識が存しているところからすれば、もと一語あったところへ、他の二語が入ってきた蓋然性が高い。アミーガ意識はもともと話し手側が他者側を他者側として区別しないところにその本質がある。従って、事物・場所・方向などが話し手側に近い関係にあるか、あるいは他者側に近い関係にあるかなどの区別は必要なく、それに応じて語形も二語形以上は必要としなかったであろうと解されるからである。

もし、一語が先にあったとすれば、それは上代語の二人称代名詞「おれ」に対応する u 系の語である蓋然性が高い。u 系の語が地域によって近称にもなり、また遠称にもなりうるということは、これがもともと定称のどれにも固定されず、全く中立的な立場の語（換言すれば普通の体言）であったことを示すものと解される。u 系のこのような性格はやはりアガーミ意識と深くつながるところがある。琉球方言の指示代名詞においては、まず、u 系の語が先にあって、そこへ後に ku 系と a 系の語が入ってきたものと推定される。

このようにして、この三つの語は時間的前後関係はありながらも、ある時期に琉球方言の中に入ってきた。しかし、そこに住んでいる人々の意識構造は、この三つの語を保持するに必要な、三者が対等な意味的はりあい関係にある [ku 系 / u 系 / a 系] の三元的意識構造ではなく、[ku 系・u 系 / a 系] か、あるいは [ku 系 / u 系・a 系] の意味的はりあい関係にある二元的意識構造であった。そのために、現在では、はりあい関係のない語形どうしの中では、そのどちらか一方が失なわれる場合もあるものと解される。

7 他の表現におけるアガーミ意識

アガーミ意識は小さくまとまった共同体の中で自然に培われてきた意識であるがゆえに、その共同体がそれほど激しい変化を蒙ることなく保たれているところでは、その言語生活の中にも明確に認めることができる。

しばしば例にとる沖縄北部の瀬底島は、他からの移住者はほとんどいなく、島の生活様式は徐々に変わってきて、そこに住む人々はほぼ一定している。人々はお互によく知りあい、気心が通じあっている。多くを語らずとも、相手の気持がよくわかる。たとえばこういう事例がある。ある年配の男の人が行きつけの島の店に買いものに行ったところ、その店に着いたとたん、どうしてもその品物の名が思い出せなかった。だからとて、その人はその品物の名を思い出そうとするけはいもみせず、いとも簡単に nu: gara fo: ra (なんとかやらを買おう) といったという。すると、店の人も至極あたりまえの表情で nu: gara ja ku: ja kiriti: bin (なんとかやらは今日は品切れしています) と答えたところ、その人は ?ansun na: (そうか) と了解して帰っていったという。

その会話は傍目には奇異に思われるが、その場を理解しているものにとっては、誠にほほえましい光景としてうつる。会話の当事者にとっては、これで十分なのである。品物の具体的な名を示すことができなくとも、ただ nu: gara (なんとかやら) と漠然と表現しただけで、聞き手にはそれがたとえば煙草だと、セブンスターなり、ハイライトなりであることが十分に伝わっているわけで

ある。アガーミ意識の支配している場における会話の一形態であるといえよう。

また、琉球方言には次のような表現法もある。用例は瀬底方言である。

- (1) tʃu: nu miri: ba ʔari m min (人が見れば、あれも見る)
- (2) tʃu: ga warari ba ʔari m warain (人が笑うと、あれも笑う)
- (3) tʃu: matta tʃi nu: su: ga (人を持たせて、なにしているのか)
- (4) tʃu: ne: mutarin (人に凭れる)
- (5) tʃu: ʔgati mukijun (人に向ける)
- (6) tʃu: tu takkwa: jun (人とくつつく)
- (7) tʃu: hara tuin (人から取る)
- (8) tʃu: mari: ʔatʃikara sun (人まで叱らせる)
- (9) tʃu: bake: min (人ばかり見る)
- (10) tʃu: ja ʔikan ri ʃi: ba nugkui ʔjun (人は行こうとするのに、なんとかかんとかいう)

琉球方言では tʃu: は“人”の意をあらわすのが普通である。従って、その意味では上記文例はごくありふれた表現である。ただし、この tʃu: が場面によっては“話し手”をあらわしたり、“聞き手”をあらわしたり、あるいはまた“まわりの特定のだれか”をあらわしたりする場合がある。これはやはり普通の表現とは多少異なるといわなければならない。

上記文例は(1)から(7)までが格助詞のついたもの、(8)と(9)は副助詞、(10)は係助詞のそれぞれついたものである。これらの文は、たしかに()で示した意味でも用いられるが、また、たとえば、家族や親戚の者が五・六人集まった場で用いられた時、異なる意味を表わす場合がある。たとえば、(1)の文だと状況によっては“私が見れば、あれ(子供)も見ると”いう意にもなるし、“あなたが見れば、あれも見ると”いう意にもなり、“兄が見れば、あれも見ると”いう意にもなる。(8)の文も“私まで叱らせる”“君まで叱らせる”“弟まで叱らせる”のどちらにもなりえる。(10)の文にしても同様、“私は行こうとするのに、なんとかかんとかいう”などの意にもなりえる。このように、tʃu: は“話し手”“聞き手”あるいはまた“まわりのだれか”をあらわす場合があるが、それがだれであるかをきめるのはその場の具体的な状況による。

さて、そこで問題なのは、琉球方言の中にも“話し手”“聞き手”をあらわす語として wan(私) ʔja:(君, おまえ) nan(あなた)などの語があるし、また“まわりのもの”をあらわすには ʔuttu(弟) ʃidʒa(兄)などの語があるのに、なぜそれらを用いずに、あえてそれらの上位概念である tʃu:(人)を用いるのかということである。これについては、やはり次のように考えることができよう。すなわち下位概念である wan(私) ʔja:(君, おまえ)などの語を用いると、当然ながら特定個人の動作なり、状態なりの表現になってしまう。そうなると、事柄・事態なりについてはより明確になろうが、その反面、それがためにまた、その集団内における共通の感情的基盤なり、連帯意識なりがこわされてしまう結果ともなりかねない。それがこわされてしまうような言語表現は、その場にそぐわないことになる。そこでこういう下位概念の語を用いるよりは、むしろ tʃu:(人)という、だれにもあてはまるような上位概念の語を用いることによって、特定個人の

動作なり状態なりをみんなで共有しているとみた方が妥当と解される。もし、そうであるなら、その場合はまさにアガーミ意識の場であり、アガーミ意識の場で用いられる *tʃu:* という語は、このような多様な意味をあらわしているといえるであろう。

さらに、琉球方言には次のような表現法もある。瀬底方言の例で示す。

- (1) *ʔama ɣgati ku: mi* (あそこへ来るか。あそこへ行くかの意)
- (2) *ʔattʃa: ku: sa* (明日来るよ。明日行くよの意)
- (3) *ʔja: ni: ɣgati ku: sa* (君のところへ来るよ。君のところへ行くよの意)
- (4) *wag ga ku: sa* (私が来るよ。私が行くよの意)
- (5) *takkurusa ri:n ro: ʔja:* (なぐられるぞお前。なぐるぞお前の意)
- (6) *kira ri:n ro:* (蹴られるぞ。蹴るぞの意)
- (7) *midʒi hakira ri: mi* (水かけられるか。水かけようかの意)

(1)から(4)の例は *ku:n* (来る)が“行く”の意で用いられたものである。*ku:n*は普通は *tʃu: nu ku:n* (人が来る) *ʔuttu nu ku:n* (弟が来る) などのように“来る”の意で用いられる。しかし、時には上記の例のように“行く”の意で用いられる場合もある。その意味は常に話し手が聞き手に向って話しかけている場面においてあらわれる。それ以外では、“行く”の意を表わすときは *ʔikun* (行く)の動詞が用いられる。*jamatu ɣgati ʔikun* (大和へ行く)。

(5)から(7)は *ri:n* (れる。受身)が能動的な意味で用いられている例である。*ri:n* (れる)も本来は“受身”で用いられる。*tʃu: ne: ʃikara ri:n* (人に使われる)。*hadʒi ʃi taba sa ri:n* (風で飛ばされる)。しかし、場合によっては、上記用例のように能動的に用いられることもあり、たとえば、(6)の例でいうと、直訳すれば“蹴られるぞ”であるが、実際は話し手が聞き手に向って“足で蹴るぞ”とどやしつけているものである。*ri:n*の前には相手になんらかの被害を与えるような意味内容を表わす動詞がくるのがほとんどである。そして、*ri:n*がこのような反対の意で用いられるのは、常に話し手と聞き手との間においてであり、しかもこの場合には両者がいがみ合っているような場面によくあらわれる。

この現象はやはりアガーミ意識を抜きにしては説明できない。すなわち、話し手が聞き手を自分と相対立する他者としてとらえず、我と同一視し、我と一体的にあるものとしてとらえるからこそこのような表現が生れるのである。

たとえば、(1)から(4)における *ku:n* (来る)が“行く”の意で用いられた例でいうならば、話し手が聞き手と心理的に同化してしまっていて、聞き手の立場に我を移して、その立場から表現したものである。実際には我の方から *ʔikun* (行く)であっても、聞き手の立場に移した我の立場からすれば、*ku:n* (来る)でなければならないのである。また、(5)から(7)までの例における *ri:n* (れる)の用法も全く同じ論理で説明できる。すなわち、話し手が聞き手の立場に我を移してしまい、その結果、実際には我が聞き手にある動作(被害)を加えることであっても、心理的に聞き手の立場に移した我の立場からすれば、ある動作(被害)を蒙ることになる。このように、常に相手と心理的に同化したアガーミ意識が基底にあるからこそ、どんなにことばではどぎついがみ合っ

いても、まわりの者は時には笑ってそのいがみ合いをながめておられるのである。

このように、一見理に反するような語の用法も、その社会の意識構造にてらしてみれば、誠に理にかなった用法であることがわかる。

注1 拙稿「奈良時代の人称代名詞について—万集におけるア・ワの意味範疇—」〔都大論究〕第10号 1972年3月 東京都立大学国語国文学会

拙稿「琉球方言における人称代名詞」〔琉球の方言〕1978年11月 法政大学沖縄文化研究所

注2 注1に同じ

注3 仲宗根政善「言語」『今帰仁村史』1975年7月 今帰仁村史編纂委員会

注4 仲原善忠 外間守善著『おもろさうし 辞典 総索引』1967年3月 角川書店 22頁

注5 時枝誠記『日本文法口語篇』1972年7月 岩波書店 代名詞についての基本的なみかたは当文献による

注6 中本正智「指示代名詞の構造と祖形」〔沖縄文化〕1978年8月 沖縄文化協会

当論文は琉球方言の指示代名詞の実態を明らかにして、それらを相互比較し、琉球方言における指示代名詞の祖形を推定したものである。その中で、奥武方言の指示代名詞の体系についても示してある。これによると、奥武方言でもku系・u系・a系の語があらわれるが、量をあらわす?ussana:(こんなにたくさん) ?ussa:(これだけ)のu系の語が近称的に用いられているのは、やはりu系がku系まで意味領域を広げていることを示すものと解される。ただし、情態をあらわす形式としてkan(こう) ?an(そう、ああ)があるが、この場合はa系がu系まで意味領域を広げている。

いずれにしても、奥武方言においてもku系・u系・a系の三者が対等なはりあい関係を保っているようにはみえない。この点でⅥ類に属させるのは多少問題があるが、ここではさしあたってそのようにしておく。